

筑紫野写生帳

中西伊之助 著

三一新書

筑紫野写生帳

定価 200円

1957年12月25日 発行

著者 中西伊之助

発行者 田畑弘

印刷所 粟津製版印刷所

製本所 蒲田文寿堂

発行所 株式会社 三一書房

京都市左京区北白川西平井町24
振替京都6403番
東京都千代田区神保町1の14
振替東京84160番

筑紫野写生帳

中西伊之助 著

三一書房

目次

第一章	春のない冬	五
第二章	泣訴か、たたかい	四三
第三章	錦蛇	七五
第四章	釘で描いた壁画	一二五
第五章	砂に描く	一六五
第六章	一粒の麦	二三九

第一章 春のない冬

一

延享三年（一七四六年）といえば、「享保の治」と善政をたたえられた八代將軍徳川吉宗が隠退して、家重が九代將軍になった翌年である。この街道は筑後久留米領の城下、久留米に達する本道だった。城主の参勤交代は、ここを通って門司赤間門（下関）に出て江戸へ上る。といてもほんの二三間の道幅で、華やかな大名行列が練り歩く本街道筋とは思われない。沿道にはちらほらと二三丁の間に農家があり、農具小屋なども見える。その中

には二三百年の老樹を背にして、一方に傾いていて太い突かい棒をしてあるので肩を落したびつこの老婆のような草葺家がある。夏なら屋根にしげった青草だけが生きものの感じだが、いまは真冬で長い枯草が軒にぶら下っている。そうした草家の一軒の前に、脚の曲りを板で斜めに打って支えてある雨ざらしで灰色になった床几があつて、それがなにかこの街道の遺蹟でもあるように感じさせる。それが丹四郎の家だった。

南国でも一月はとても寒い。それにこの地方には近年めずらしくひどい大雪だった。雪が荒っぽい北風にあふりつけられて、地上に白い煙を上げていた。大三国嶽も近くにある山々も、久留米城もすっかり塗りつぶされて、死仮面のような田圃も街道も銀一色になり、並木が笛を吹いているような、明るい暗さだった。三原郡の百姓半兵衛が街道を歩いて行くよりほかに生きているものはいなかった。半兵衛はきょうはどうでも久留米の城下の棉問屋に棉の売かけ代金を取りに行かねばならなかった。向うで日をきめたからである。やっつくれたので、ふところに一両二分あつて、ちよつと豊かな氣持になっていた。しかし肥料代を払えばとんとんで、もちろん手間賃

も出ない。高い運上（税）と、問屋、機屋、肥料商をもうけさせるばかりだが、棉作は織物を特産として、久留米表高三十二万石を上まわる収入がありそのために藩からの割当てであり、またそんな換金農業をやらないと現金がまわらないので、日用雜貨が手にはいらない。それで借金がふえるばかりだと知りつつやらざるをえなかった。半兵衛はそれでいて、中農であり、一町六七反の水田と七八反の畑を持っていた。昔は庄屋だったが今では商業資本に巧みに便乗するものに取って代わられて本百姓格に落ちている。経書も読み、村では文字のあるほうで、領分では顔も広いし、温厚で尊敬もされている。まんじゅう笠に合羽姿の、小柄で目鼻立ちのはっきりした、唇の引きしまった顔立だから、ちよっと親しみがたい感じだが一どその人に近づくと、いが栗の外皮を剥いて中身の肉のしつくりとした、甘くて芳ばしい持ち味があった。まだ四十あまりである。

笠を目深かにかぶり、その端を右手でつかんで、うしろから風に押されて行くと、吹雪の中から十二三人と、つづいて七八人の一家らしい二組が太い麻縄で、夫婦を先きに珠数つなぎにされて引っ立てられて来るのがあら

われた。一組に捕り手二人が、前後についている。年貢運上が払えないから領分を逃げ出そうとしたのを捕えられたのである。決してめずらしいことではない。きょうはまだ来るだろう。こんな日をえらんで苦しませるためである。半兵衛はすれちがいに、老人や女子供の泣き叫ぶ声が総身の血を凍らせて、耳を掩うた。人間の泣き声は、人間の心をしびれさせる。へたばかりかけるのを太い十手で、びしりと一撃腰にくれる。先きに立って舟を曳くようにして行く一家の親爺らしいのが、その泣き声でつい足をにぶらせると、親爺の背中さらに凄い一撃をくれる。半兵衛は胸にしっかりあたためていた財布を急いで引き出して、中から一分金（当時の二十五匁）をつかんで、十二三人のあとについている捕り手にそっと握らせた。その捕り手はすると顔をつき上げて、

「おい」と前の捕り手に大きい声をかけた。その声でふりむくと、心得たもので、立ちどまって前から順々に縄をといた。あとの七八人にも、前へ来た捕り手にまた一分金を握らせた。前の十二三人のほうは、向うむいて泣いて行くのだから、これはどうしたことがと、ぼんやりしている。あとの一家は救われたことがわかってい

ので、その親爺はうれしそうに、前の一家へ、

「この旦那さまがお助け下さったのじゃ」

とうれしそうに大声を出した。と、二組のしなびた赤ん坊を背負った夫婦や老人たちは、雪の上にべたりと土下座した。

そして二人の親爺は自分の村と名を名のって、半兵衛を伏し拝んだ。一人は仙蔵、も一人のは音兵衛といった。大勢の年子のような子供たちばかりが、泣きはらした目で、ぽかんと父母や祖父母をながめて立っていたが、幼いのは急に寒さを感じてまた泣き出した。はらもへつてゐるのだろう。みんなの着ているものは、生地もはつきりしないぼろの下った雑巾だった。そのぼろがつららになって、あたまから涙と一しょに、ひびだらけの赤い頬にしずくがしたたっている。半兵衛は一人一人、土下座しているものの腕をとって立たせた。そして一分金を一つずつやった。二人の親爺は半兵衛にすがりついて名をきいたがそのうちお前さんたちの家にたずねて行って相談にのる、ここで名をいうことはないといって別れた。大勢が泣いてよろこぶ声がいつまでもつづいて、あとからぞろぞろついて来た。村へかえるのだった。

半兵衛はそれから丹四郎の家に行った。丹四郎は養子だった。女房のおふじの娘のころ、おふじは看板娘で表の葎簀張りの中に床几を一脚、煮豆、豆腐、煮魚、四季折々のものなどをならべ、草鞋もあれば、提灯、ろうそくもある。地酒や芋焼酒をのました。昼は街道筋の旅の客、夜は近在の若ものが常連だった。田畑は一坪もなくても、それでけっこう、おふじの一家はやって行けた。もう二十年も前のことである。この二十年間に、世の中はめっきり変った。というよりも、藩政に痛めつけられてといったほうがいい。大阪あたりの同業組合の発達に伴い、特産の木綿織（久留米絣と称するようになったのは、天明のころから）の値上りで、それに圧倒された近在の中小商人の足がぱったりとまるし、幕府へ諸藩からの上げ米は後に廃止になったが、しかし年貢米は年々に釣り上げられる。運上の重課と税課目の増加夫役の繁多、戸別税、甚しい藩札の乱発、等々で、村の若い衆の姿はおふじの店に見えなくなった。享保十四年八月、太田体愚の著わした「民間省要」に「こんなに作物を根こそぎ取り上げてしまっても、小作百姓はやはり生きてゐる。そして朝から夜までよく働く。なにを食っているのかふ

しぎなことである。大方みみずのように土でも食っているであろう。はい！ そんなことをおくびにも口に出したらいへんだ。

あなかしこ、あなかしこ……」

これは地主、地頭の氣持を皮肉ったものである。

この間に、目ばしい農民騒動は、享保十四年（一七二九年）九月、陸奥、信夫伊達二郡、四国九州の窮民蜂起であるが、全国いたるところに百姓はけっ起した。

半兵衛と丹四郎は同じ村の村方三役の家の三男に生れ、同じ寺子屋に通った。丹四郎は學問はあんまり好きでなく、早くやめた。青年時代にはおふじに惚れて、夢中になり、自分の村から毎晩遠い道を通った。とうとう田地三反ばかり分けてもらって養子にはいりこんだ。自作三反ばかりでは、次々と子供ができるのでやって行けるわけがない。この二十年近くひどい苦しみかたをした。実家を相続している兄からもさんざんしぼり上げた。兄は丹四郎を浄瑠璃にある「いがみの権太」だといった。人物はあくまで素朴で純情な情熱児だが、少しエクセレントリックで、粗暴だった。半兵衛とはいわゆる水魚の交りだが、その性格の相反するところがかえって親密にし

たし、また丹四郎は半兵衛に喧嘩を吹っかけても、半兵衛は相手にしなかった。二人の一致しているのは、もうこれなりでは百姓はやっていけない。おたがいがいのちをすてる覚悟でなんとかしなければならぬということだった。それにも二人の意見が食いちがつていた。丹四郎は、十六軒の大庄屋の中の最も悪い原田吉右衛門の一家を責め潰したら、大庄屋のやつらや、藩の奸臣どもも驚いて善政をやるだろうという。人の血を流して人を救うということとは矛盾している。一人の人間の血も流してはならぬ。あくまでも平和な手段で人を救おう。と、半兵衛はいう。双方は自説を固持してゆずらない。

近ごろ、丹四郎は、自説を実行するために内々で郡中をかけまわっている様子である。この竹馬の友に、百姓のためにいのちをすてるなら、すて甲斐のあるようなことをやらせたい。丹四郎は、元禄十五年（一七〇二年）十二月十四日の雪の夜吉良邸を襲って吉良の首を取った大石良雄のようにやるのだと半兵衛にいった。村芝居を見たのである。とこできようは、あたかもその十二月十四日で、それにこの大雪だ。丹四郎の派手な夢を、きっと今夜は生かされるにちがいない。半兵衛はそれで丹

四郎の家に寄ってみたのだった。

丹四郎の女房のおふじは、長い栄養失調から夜盲、それから失明した。十四人の子供を生んだことも大きい原因の一つかも知れない。三反の自作と、大庄屋原田吉右衛門の小作田畑合せて五反で、その五反も米はもちろん裏作の麦や芋まで半分は取られる。長男の二十二才の勝造（丹四郎は結婚前におふじに勝造を生ませた）次男の二十一の文吉は、暮しの苦しさから家抱（奴隸）に売られるのがいやで、大坂へ出奔し、長女二十のいま、十八の次女のしな、三男の十七の竹五郎、四男の十六の梅吉、五男の十四の留助の五人は原田家の家抱や、工場の織婦（奴隸）に売られ、六男の十三の又吉、七男の十二の松兵衛、八男の十の八兵衛と、三女の八つのお糸の四人は、伊久喜郡の大庄屋青山潜六へ家抱や織婦に売られていた。あとに幼いのが三人いる。おふじはもう五十近いが、それほど子供を生んでもその容貌は昔をしのばれるほどで、くつきりと白い顔の、豊頬の肉は削げているが、わずかに受け口の上品な唇は、いまでも可愛いく感じられる。白々とした大きい二皮目をしょぼつかせて、上り口にあぐらをかいて縄をなっていた。なれたもので、打った藁

をそばにおき、分量だけつかんで前のに継ぎ足し、下から拌み上げるようにさらさらとなつて、その分は腰を浮かせてうしろへ引く。それがうしろでうず高い山になっていた。半兵衛がはいって行くと、その方へ耳を向けて、

「おお半兵衛どんか」

と、かんよくいった。半兵衛は、丹四郎はどこへ行つたかときくと、出先は一切いわん、きのう出て行つたきりかえつて来ないといった。子供たちはときくと、けさから幾組も引つ立てられて行くので、おそろしがって、奥の間にちこまっている、白い目をしょぼつかせて笑顔を見せた。どこかなまめかしい。ここは次々と子供を売って年貢連上はどうにか納めてあつた。青山家に売られて行つた四人は、青山家の嗣子の秀左衛門が領分出の家抱や織婦に、父にかくしてできるだけは貢いでやっていた。しかしおふじは、自作三反から上るものと、いまでは縄代でやつと五人がなにか食っているが、それも前借りになっているからどうしようかと思つている。丹四郎に相談するとおこるので困るといった。半兵衛はおふじにきかずともわかつていた。おふじに一分金二つ握らせた。これで半兵衛の棉代金二両二分は、おしまいになった。

それから子供たちをよんで、城下で買って自分の子どもとこの子持ちに分けてやるためのあまから煎餅を出してやった。子供たちは半兵衛の肩にすがったり膝にのったりして食って、半兵衛の肩も膝も煎餅の粉だらけにした。そうしておふじと話しているうちにおふじは、丹四郎がちかごろは、三原郡の三十郎のところへたびたび行くような様子で三十郎も来たことがあるといった。半兵衛は三十郎という人は知らないが、それでは画策の相談相手らしい。こんばん、その家をつくことだ。この大雪の夜に会合して、なにを談合するのだろうと思った。しかし半兵衛は三十郎の家を知らない。おふじにきいてみると、三原郡でもだいぶ山奥で、山の中にあるような家だそうだが、おふじは行ったことがないという。半兵衛はたずねてでも行ってみようと思った。というのは、半兵衛はこの百姓の苦しみをどうかして救ってやりたい。身を殺しても救いたい。こう紊乱している藩政を改めるにはもはや紙の願文では間に合わない。そこまでは丹四郎と意見は合うのだが、その手段が全くちがっている。たびたび落ち合って議論するが、夜が明けても片づかない。だが、丹四郎は使えば使える立派な人物である。軽

はずみなことをして、殺させたくはない。しかしきつと軽るはずみなことをするにちがいない。子供のときから人の意表に出るようなことをする。寺子屋時代、師匠の和尚に叱られたのが口惜しいといって、寺の庫裡のとなりの炭小屋に火をつけて寺を焼こうとした。青年時代でも、養子になったのをばかにされたといって、養子先きの部落の若い衆をみんな向へまわして大立ちまわりをした。そんな性格はいまでも多分に持っている。父がいっもないいさびしい子供たちは、やさしいおじさんがかえるのをいやがってすがりつくのをやっと出て行った。出るとすぐ藩の国老を補佐する用席詰の次席、村上数馬の邸に中間奉公をしている作平に会った。作平は親が年貢の未進で入牢するのを救うために昨年十六才で売られて来た奴隷だった。それが妹のお玉が十四になると遊女になって作平の身代金を払ってくれたので自由の身になり、年二分（五十銭）の給金で働いている。そのころ、青山家の織婦に売られていた丹四郎の娘のお糸は妹のお玉とおない年で十四になっていた。作平と幼な馴染みで、聡明な上に、美人系の母のおふじそっくりの、あでやかさ、なまめかしさだったので、とても好きだった。そして青

山家の織物工場へ公用のひまをぬすんで小づかいをやつても戸外へは出られないから、なけなしの給金で物を買って会いに行った。どこの工場でも親兄妹にさえ会わないのだが、青山家の嗣子の秀左衛門は、織婦の二百人あまりもいる工場の総元締をしているので、だれでも事情をきいて会わせてやるように秘書の庄三に命じておいた。庄三から作平のことをきくと、その境遇や純情に同情して、直接自分で会ってみたりした。作平はおふじや丹四郎にお糸の無事なことや、ことづけなどで始終やつて来る。半兵衛はそれをつかまえたのだった。そして作平から丹四郎の今夜の様子をさぐろうとした。それで街道の飲み屋へつれて行って寒さで唇の色もない作平に強い芋焼酒をのませ、棉代金はなくなったが財布の底をはたいてまた一分やつた。年二分の給金である。これでもたお糸をよろこばせる。それにのみたくてもものめない酒で、すっかりいい気持になった。半兵衛にうまくかまをかけられて、べらべらしゃべってしまった。——今夜、三原郡の三十郎の家に一味が十五六人勢ぞろいして、三原郡の大庄屋原田吉右衛門の家に夜襲をかけ、原田一家を責め潰して、みな殺しにする——というのだった。

「あの吉右衛門や息子の惣左衛門は、おいしゃんや、おししゃんを手ごめにしたちゆうて、おじしゃん、火のごとおこつとらすたい」と作平はいった。

「そんなこつ、どこの大庄屋でんやつとるたい、めずらしいなか」

「いんにゃ、青山の若旦那さまは決してそんなこつやらっさん」

半兵衛は笑って、

「旦那がやるたい。男はどげんもんでん、よかおなごが好きじゃ。そのうち、丹四郎とこのお糸のやつに手をつけるばい。あの若旦那もええ男前じゃけん、お糸も惚れるたい」

作平は、かっとした。男前といえば自分に自信はない。邸中では「蟹」で通っている。秀左衛門はことし二十二才、男でも惚れ惚れする美男である。作平はたたきのめされた気持になった。半兵衛は丹四郎のうちに来る作平の様子を知っていたので、

「しかし作平、相手は金持地持の大庄屋中の大庄屋じや。お糸は利巧なやつじゃから嫁さんにしてもらえんのは知つとる。そのうちわれの親切がわかれば、われと夫

婦になるたい」

が、半兵衛は、平作が丹四郎の一味に引き入れられていることだろうから今夜は三十郎の家に行くだろう。その後をつけてやろうと思った。作平は丹四郎の家にしばらくいて出て行った。飲み屋にいて作平の様子を見ていてあとをつけた半兵衛は、作平が三原郡の方へ行かず、伊久喜郡の方へ行くので、この雪にお糸にあたたかいじゅばんでも買って持って行ってやるのだろうと思った。日はもうくれかかっている。半兵衛は吹雪の中を三原郡目ざして、からだそっくり吹きとばされそうになるのをうんと全身に力をこめて歩いた。

二

夜に入ると、雪はますますはげしくなった。半兵衛が三十郎の家をやつとさがし当てたのは、徳雪寺の鐘が吹雪に送られて初更（八時）がきこえてから半どき（一時間）もたったのちだった。半兵衛は汗がじんわりと肌をしめしている。それでいて、窓の下へそっと寄ると、す

ぐ下半身が、凍って感覚を失いそうだった。じつと話声をきいていると、酒盛りをしている十五六人がいることもわかるし、作平も来ている。そしてなにか半兵衛のことを丹四郎にしきりに話していると、みんながだまってきたいているようだが、なにをいつているのかわからなかった。丹四郎が酒のまわった大声で、なんども

「半兵衛のやつ、ここへ来やがつてみい、たたき殺してくれど！」というのだけははつきりきこえた。半兵衛は、やりかねないだろうと思った。あちこちの老樹から重い積雪が、ばさりばさりと落ちる。その一つが半兵衛の笠の上に落ちた。笠をぬいで、這うように、そつと窓下をはなれて角を曲った。

「なんじゃろかい、だれか来とるようじゃ」

一人が、いきなり窓の雨戸を引き開けた。雨戸の木の楔を抜くので少しひまがあった。半身をのり出し、雪明りにすかせて戸外を見まわしたものは、たれもない、おおかた、芭蕉の大葉が風にあふられて雪が落ちたのだろうといった。

「犬の二足や三足いたっちゃよか。首途の血祭りかどでにしてやるたい！ さあ皆の衆、すっかり顔もそろうた。用

意も十分じゃ。少し早かじゃが、善はいそげや。この大雪は天の助けで、赤穂浪人そっくりじゃ。幸先がええど！」の大声である。窓の下にだれかいるようで、邪魔がはいらないうちにとの下心もあった。雨具などまるでつけず、すっきりした新しい野良着に身を固めた十五六人が、丹四郎の力強い声に応じて、口々に叫び叫び、広い土間にドッと降りた。そして松脂を細くした枝にボサをまぜた松明に火をつけると、パチパチと元氣よく燃え上った。酔って赤くなった顔はだれも目が凄く光って、鬼のようである。表戸ががらりと引き開けられると、手に手に大鍬、爪鍬（熊手形）大鎌に柄をつけた薙刀のようなものや竹槍などを持って、右手に松明をふりかざして前の広場にあらわれた。そこへのっそりと雪だるまになった半兵衛が立ちはだかった。

「皆の衆、冷たいものがよう降るの、それに勇ましいいで立ちで、どこへおいでじゃな」ぎよっとした一同は、松明を半兵衛の顔につきつけた。半兵衛の顔はだれも知っている。いま作平が話していたので、さては半兵衛が窓のそとにいたのかと思った。丹四郎は半兵衛の前につかつかち出て、砥ぎすませてきらきら光る大鎌に太い柄

をつけた薙刀を、半兵衛を威嚇するようにどーんとついて、目を釣り上げ、唇をゆがめて、大声をはり上げた。

「やい半兵衛、われここへなんしにうせた、この大鎌でその首をころりと落してもらいたいじゃな！」

丹四郎の大声で、半兵衛がてっきり妨害に来たのだらうとみんなそのまわりを取りかこんだ。気が立っているので、ちよっとしたことばのいきちがいか、誤解で、半兵衛の横ばらを、いきなり竹槍でぐさりと一刺しにしそうだった。半兵衛は落ちついていいる。しかし、横ざまに吹き荒ぶ大雪の中に、笠はすて、合羽は途中で風にむしり取られて突っ立っているもう田舎では老境にはいっている農夫のすがたは、落ちついていいるというより、孤立してしょんぼりしていいると云ってよかつた。半兵衛は、静かだが底力のある太い声でいった。

「丹四郎、おれはなにしに来たのでもないわい。おれはご領分七郡の二十数万（人口）の百姓や、子供のうちから仲よう遊んだわれたちが可愛いから来たんじゃ。無法な企てはやめてくれ」

「しゃら臭い！ そんな寝言きく耳持たん。口では人情づくめでなにをほさこうと、われの臆病未練なはらの

底はわかり切っている。邪魔立てすると、その分でおかんど。そこどけ！」

いまにも大鎌を半兵衛の首に引っかけそうな意気込みである。半兵衛はやはり静かだ。

「臆病未練ならこんなどころへは来ん！」

その声だけは毅然^{きぜん}としている。「おれは、われに殺されても、この企てをやめさせる」

「やめさせるなら、見事やめさせて見よ！」

「それでは、どうしてもわれがやめんならんことを一つきかしてやる。吉右衛門の家では、今夜われたちが責め潰しに来ることをよう知ってちゃんと用意して待っているぞ」

「……………」

「そうればびっくりしたろう。あの吉右衛門となれ合うて悪業をつんでいる城代家老の赤松主膳どのの手で数十人の腕達者な家中侍が、いつでも来いと手ぐすね引いて待っている。それは夜盗物取りの目的じゃによって、一人のこらず斬りすてよとのことじゃ。とんで火に入る夏の虫とはわれたちじゃ。われたちは、そんな汚名を受けて殺されてもええのか。どうじゃ、わかったか」

「……………」

さすがの丹四郎も、じっと考えこんだ。半兵衛はこの企てをやめさせるために、でたらめをいつているのかもしれないが、善のためならうそも方便と釈迦もゆるしている。丹四郎はもしそれがほんとうなら、半兵衛のいう通りであると思った。

「一言もいわさず闇から闇に皆殺にしまえというのは、捕えて糺問^{きうもん}でもしようものなら、自分の悪事ろけんになろうからじゃ」

「半兵衛、われそんなことまでどうして知っている」
丹四郎は少ししおれていた。しかし、そんなことをいう半兵衛が合点いかなかった。半兵衛もまた、それに答えねばならなかった。丹四郎はだれか内通したやつがあらうと考えたが、半兵衛を疑うようなことは、それだけは決してなかった。半兵衛はうなずいて、

「もちろん、金に目がくらんで内通したもんがあるのじゃ」

半兵衛は、そういわざるをえなかった。

「うん、金に目がくらんで……そうじゃろう、そいつはどこにいる」と、丹四郎は無遠慮に一味の中のもの

顔を一応にらみまわしたが、ふと考えて、

「やい半兵衛、われそげんそらごとでつち上げくさつて、おれたちの一味をかきまわしにうせたな。われはおれとちごうて、学のあるえらい知恵者じゃ。その手は食わんぞ！」

「そうか、そんならもう止めん。野盗物取りの汚名を着せられてみな殺しになるがええわい」半兵衛は、つっぱなした。そして静かにつづけていった。「見うけたところ、たったこれだけの人数でたいした武具も持たずに、たとえ首尾よう原田吉右衛門一家を責め潰ぶしたところで、まだあとに十五軒の大庄屋がいる。まして奸臣がいっぱいはびこっている久留米三十二万石は貧乏ゆるぎもせんのだ。それよりもおれのいうように、たった一人のいのちですんで、全久留米領の百姓の塗炭の苦が救える手立てをするのがええのだ。われほどのもんが、どうしてその道理がわからんのじゃ。そらわれが吉右衛門一人を恨む気持はようわかる。しかし気持ばかりで闇雲にはやり立ってもこの悪政はようならん。かえって奸臣共の大きい利分になるのだ」

「いんにゃ。今夜皆殺にされても一騒ぎするだけで大

き利分になるわい！」

「まだわからん見えるな」さつきから固唾かたづをのんできいていた人々に向つて、半兵衛は、「皆の衆、皆の衆の中でわしのいうことわかってもらえる仁あるじゃろうか……」

「いかさま、半兵衛どんのいわれることはようわかる。どちらにしてもこんなところでは話はならん。どうきめるにしてもまだ時刻は早い。中へはいつてとつくり話し合うことじゃ」

この家の主人の三十郎である。丹四郎は三十郎の横顔にぎょろりと一瞥べつをくれて、

「三十郎どんはなにをいうのだ。半兵衛のいうたことで臆病風が吹いて来たか。切りくずしがよう利いた。半兵衛、もう我慢がならん、覚悟せえ！」と叫んだ丹四郎は、一步退いて、やにわに大鎌を半兵衛の首の頸動脈を目かけて、横ざまにうなりの立つような勢いでただ一と打ちに首をかつとばしてくれようとばかり、両腕に力をこめてふり上げた。三十郎やはかの二三人は驚いて、その両腕にすがりついた。